道徳科

子どもが「学びをつなぐ」道徳科学習

田中　聖二

昨年度までの研究の概要

道徳科における「学びをつなぐ」姿とは、「教材に含まれる道徳的な問題を自分事として捉え、仲間との議論において、多様な価値観にふれ、自分の価値観を広げ深めるなかで、子ども一人一人が自分なりの答えを導き出していき、生活につなげ、よりよく生きていこうとする姿」と考える。

このような学びをつなぐ姿をめざし、道徳科では、これまでに次のような内容について研究を行ってきた。

- ○　問題意識をもたせる導入の在り方（道徳的問題の分析・導入の工夫）
- ○　子どもが学びをつなぐための授業の展開（問い返しの工夫・子どもの思考をつなぐ板書）
- ○　子どもの思考をつなぐ教材分析と発問構成（ねらいに迫るための発問構成）
- ○　新たな価値観を自分自身につなぐための手立て（自分事として考える場面の設定　等）

これまでの研究から、教師が教材分析を基にねらいを明確にし、そのねらいに迫るために導入を工夫したり、発問構成を考えたりすることの重要性が明らかになってきた。また、子どもの日常の様子を授業のなかで効果的に取り上げることや、板書を構造的に行うことで、子どもが新たな価値観を自分自身とつなげながら学習をふりかえる姿も見られた。一方で、仲間の意見を基に、自分の考えを見つめ直したり、立場を変えて考えたりするといった、「多面的・多角的に考える」ことについては課題として挙げられる。また、道徳科は、学校教育全体で行われる道徳教育の要としての役割があるものの、他教科等との関連がうまく図られていないという課題もある。

そこで本年度は、学びをつなぐ姿のなかの「これまでの学びを生かす姿」「仲間の考えを生かす姿」の２つの姿に焦点を当てて研究していく。他教科等との関連については、道徳科と特に関連が大きいと思われる、特別活動との関連を図った授業の構想について研究を行いたい。

研究内容

1　子どもが「学びをつなぐ」ための学習指導の在り方
⑴　道徳科と特別活動を関連させた授業の構想
⑵　物事を多面的・多角的に考えるための手立て

研究内容の基本的な考え方

昨年度までの研究から見えてきた課題を基に、本年度は以下の２つの内容について研究を行う。

1　子どもが「学びをつなぐ」ための学習指導の在り方

⑴　道徳科と特別活動を関連させた授業の構想

本来道徳科は、教育活動全体で行われる道徳教育の要としての役割を担っており、全ての教育活動との関連を意識した授業の展開が望まれている。しかし、教育活動全体と道徳科をどのように関連付ければよいのかということについては曖昧な部分が多く、課題がある。そこで、本年度は、特に道徳教育との関連が大きいと思われる特別活動と、道徳科の関連を意識した授業の構想について研究を行いたい。

具体的には、道徳科と特別活動の関連を意識した学習プランの見直しを行っていく。そして、それぞれの授業をどのように関連付け、授業を展開していくのかということについて、実践をとおして考えていきたい。また、関連させることで、どのようなよさがあるのかについて、子どものノート記述や発言等の姿を基に考察していく。

また、道徳科と特別活動を関連させるための手立てとして、教室内の掲示物の在り方も重要であると考える。教室のなかには、キャリアパスポートや学級目標、係活動や行事の写真等、特別活動に関する掲示物が多くある。そして、それらの内容と道徳科の内容項目には関連するところが多い。掲示物は子どもが普段からよく目にするため、道徳科と特別活動の関連を意識した掲示物の在り方についても研究を行っていきたい。

⑵　物事を多面的・多角的に考えるための手立て

子どもは、教材を基に道徳的諸価値について自分事として考えたり、仲間との議論をとおして多面的・多角的に考えたりすることで、新たな価値観を生み出していく。下の図は、子どもが新たな価値観を生み出していく過程を図式化したものである。

【　新たな価値観を獲得するイメージ図　】

昨年度の研究では、特に自分事として考えるための手立てに焦点を当てて研究を進めてきた。今年度は、研究の柱にもある、「仲間の考えを生かす姿」にもつながる、「仲間との議論をとおして多面的・多角的に考える」というところに焦点を当てて研究を行いたい。

具体的には２つの視点で研究を行う。１つめの視点は、多面的・多角的に考えることができる発問についてである。これまで道徳科では、人物の心情について問うような発問が多く行われてきた。しかし、「〇〇はどう思ったか」のような心情を問う発問だけでは、なかなか子どもが多面的・多角的に考えることは難しいと感じることがある。そこで、「自分だったらどうするか」といった、立場を明確にしながら議論を行うような発問や、「なぜこのような行動を取ったのか」といった分析的な思考を促す発問等、子どもが多面的・多角的に考えることができるような発問について研究を行っていく。

２つめは、多面的・多角的な思考を促す板書について研究を行う。板書の役割は、子どもの考えを可視化できるところにあると考える。また、黒板に書く位置や内容によって、考えを分類したり、対立等の関係を明確にしたりすることもできる。また、挿絵を効果的に使うことで、立場によって考えが違うことを表現することもできる。子どもが多面的・多角的に考えるためには、板書の在り方はとても重要であると考える。

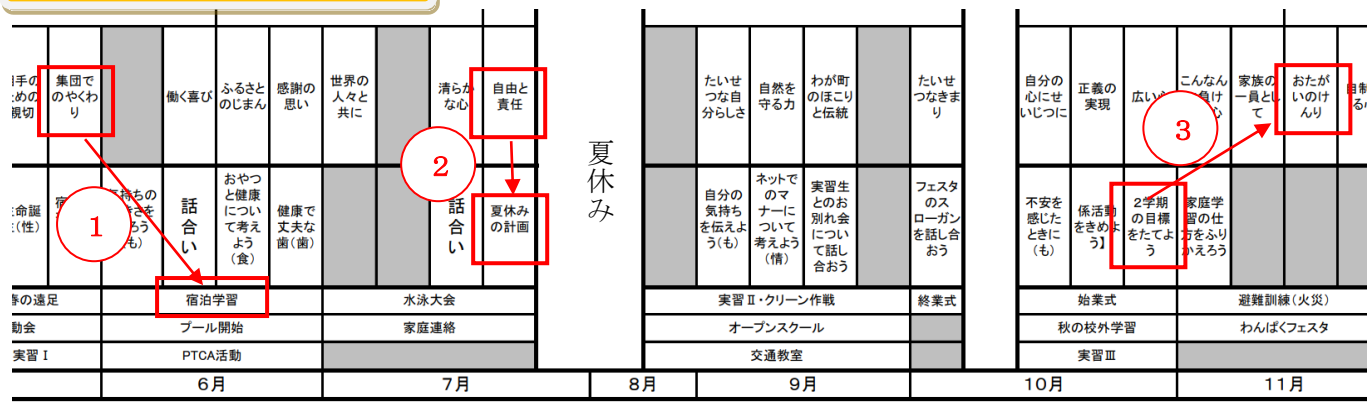
研究の実際

1　子どもが「学びをつなぐ」ための学習指導の在り方～第５学年の実践より～

(1)　道徳科と特別活動を関連させた授業の構想

学習プランを基に、内容面で関連させやすい学習の時期を変え、関連を意識した学習を行った。

関連させる内容及び時期について



特に関連を意識した授業は、次の３つである

道徳科　主題「集団での役割」教材『真由、班長になる』内容項目（よりよい学校生活、集団生活の充実）
特別活動　「集団宿泊学習」

①　集団宿泊学習の前に、実施時期を９月から５月に変更し、道徳科学習で「集団の役割」についての学習を行った。道徳科学習のなかでは、どうすれば仲間と上手に行動することができるかについて考える姿が見られた。ふりかえりには、リーダーとして心掛けたいことや、互いの思いを尊重しながら行動したいこと等、集団宿泊学習と道徳科学習で考えたことを関連付けて書く子どもが多くいた。

『真由、班長になる』を学習して思ったことが２つあります。１つめは、声かけをする時にチクチク言葉を使わずにフワフワ言葉を使えばよいと思いました。２つめは、**私は宿泊学習で班長だから、**声かけをするときは、「～して。」ではなく、優しく「～してくれない。」という声かけをしたらよいと思いました。みんなでもめ事にならないように、他の人の気持ちをきちんと考えようと思いました。　【A 児のふりかえり記述】

道徳科　主題「自由と責任」教材『ぼくたちの夏休み自由研究』内容項目（善悪の判断、自律、自由と責任）
特別活動　「夏休みの計画を立てよう」

②　特別活動の「夏休みの計画を立てよう」の学習の前に、道徳科で「自由と責任」についての学習を行った。夏休みの宿題について取り扱った内容であったため、自分事として考える姿が見られた。また、特別活動の学習で、夏休みの計画を立てる際には、道徳科での学習を基にする姿が見られた。

僕はこの学習をして、責任感が大切であるということを実感しました。シュンさんが、遊んでいて自由研究が終わらなかったという例を学習して、自分もたまに責任感が足りていないところもあるので、改善していこうと思いました。また、今回の場合は友達３人にも迷惑がかかっているので、自分はまだそれほど迷惑をかけるようなことはしていないと思いますが、**意識して夏休みや学校・日常生活で生かしていこう**と思いました。
【B 児のふりかえり記述】

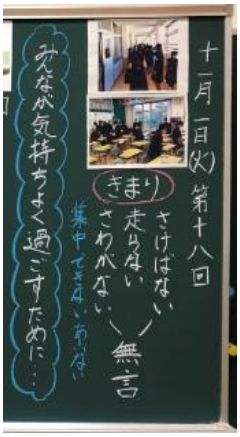
道徳科　主題「おたがいの権利」教材『住みよいマンション』内容項目（規則の尊重）
特別活動　「２学期の目標を立てよう」

③　特別活動で、１学期のふりかえりを基に、「２学期の目標を立てよう」の学習を行い、よりよい学級にするための４つの目標を立てた。そのなかの１つに「きまりを守る」という目標があり、道徳科「おたがいの権利」の学習との関連を図って授業を行った。

今日、金曜日に行う佐土原ナスクッキングの計画を立てました。D さんがお休みだったので、E さんと、F さんと話し合いました。話し合っていくうちに、『ナスの味噌汁』か『ナスの梅和え』のどちらかにすることにしました。**道徳や国語で習ったことを生かしながら、**平和に**相手の意見も大切にしながら**話しました。最後は味噌汁に決まりましたが、気持ちよく決まりました。本番がとても楽しみです。おいしいナスの味噌汁になるといいなと思いました。
【C 児の日記】

道徳科と特別活動の関連を意識した授業を行うことで、道徳科の学習をこれからの生活や行事等と関連させながら考える姿が見られた。また、道徳科と特別活動等、他教科等との関連を意識することで、C 児のように、それぞれの学びを関連付けたり、学んだことを実生活で生かそうとしたりする姿が見られた。

道徳科の授業に特別活動の学習を生かすための手立てについて



左の写真は、学習プラン③の道徳科の導入部分の板書である。廊下や教室の様子を写真で提示し、きまりがあることを想起させた後、「きまりがあるから気持ちよく過ごせていますよね？」と発問をした。すると、「きまりがあってもうるさくなることがある。」等、以前特別活動の学習で目標として挙げられた「きまり」に関する発言が出てきた。そこで、教室後方の掲示物を生かしながら、学習テーマを設定した。

終末では、もう一度学級の課題について意識させた後にふりかえりを書く活動を行った。ふりかえりの内容を読むと、道徳の学習と自分の学校生活を関連付けながら、自分事として学習をふりかえる姿が見られた。道徳科と特別活動を関連付けるよさは、日常と学習をつなげやすくするという面もあることが分かる。

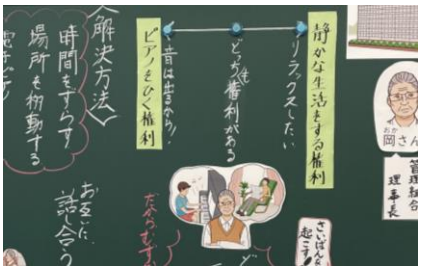
【ふりかえりの記述】

お互いの権利を大事にする必要があると思いました。今日の学習は、家だけではなく、**学校や学級でも活用できる**と思いました。【G 児】

これからは、自分だけではなく、**クラスのみんなも気持ちよく過ごせるために**工夫する。思ったことは話し合い、相手の立場に立って考えて**生活をする。**【H 児】

⑵　物事を多面的・多角的に考えるための手立て

発問について　　**板書について**

『ぼくたちの夏休み自由研究』 発問「シュンの何が悪かったのか？」		【板書の効果】
【学習プラン②】 宿題が間に合わなかった理由について、自由と責任、節度・節制、友情・信頼等の面から考えられるように、「シュンの何が悪かったのか？」と発問をした。 子どもは、節度・節制、正直・誠実、自由と責任の面から問題点について考え、発言をする姿が見られた。	 【ウェビングマップ】	ウェビングマップで意見を整理した。左側は節度・節制、右側は自由と責任に関すること、下に正直・正直に関することとまとめた。このように書く場所を意図的に分けることで、多面的・多角的に考えることにつながると考える。
『住みよいマンション』 発問「どちらの意見に共感できますか？」		【板書の効果】
【学習プラン③】 お互いの権利を主張し合うだけでは、問題を解決することは難しいということに気付けるように、「どちらの意見に共感できますか？」と発問をした。 子どもは両者の立場に立って考え、自分の考えをもち仲間と議論するなかで、自分の考えを見つめ直す姿が見られた。	 【スケールチャート】	スケールチャートを使うことで、両者の意見が対立していることを視覚的に捉えやすくした。また、チャート上にマグネットを置かせることで、立場を明確にしながら発言することができ、右か左ではなく、迷う気持ちもマグネットを置く位置で表すことができた。

「シュンの何が悪かったのか？」の発問に対して、初めは節度・節制に関する意見が多く出されたため、中心より左側に発言を板書していた。途中から自由と責任に関する発言が多くなった。そこで、中心から右側に板書を始めた。すると子どもから「それは、新しい意見だね。」というつぶやきがあった。このことから、子どもは仲間の発言を聞いたり、教師が板書をする位置を確認したりしながら、仲間の発言を視点毎に分類・整理しているのではないかと考える。

発問の特徴に合わせて板書を視覚的に工夫することで、子どもが多面的・多角的に考えることを、より手助けすることにつながることが分かった。

今年度の研究のまとめ

1　子どもが「学びをつなぐ」ための学習指導の在り方

⑴　道徳科と特別活動を関連させた授業の構想

○　道徳科と特別活動を関連できるように配列を工夫したり、関連を意識した授業の展開や掲示物の工夫を行ったりすることで、道徳科での学びと特別活動、日常生活をよりつなげて考える姿が見られた。

●　道徳科と特別活動の全てを関連させるのは難しい。そのため、どの内容を関連させるのかという視点を明確にして、年間をとおして関連を図る内容をより精選していく必要がある。

⑵　物事を多面的・多角的に考えるための手立て

○　違う立場からも考えられるような発問を行ったり、子どもの発言を分類・整理し、構造的に板書で表したりすることで、子どもが多面的・多角的に考える姿が見られた。

参考文献：こだわりの道徳授業レシピ　浅見哲也【著】東洋館出版社　2020